

子育て中の親の外出等に関する アンケート調査

【結果サマリー】

2020 年 3 月

I 2019 年調査概要と 2010 年調査との対象者状況の比較

1. 2019 年調査概要

(1) 調査目的

「身近な子育て応援活動」推進のための基礎資料として、子育て中の親(=3 歳未満の子どもを有する父母または現在妊娠中の母親及びその配偶者)を対象に、子育てを取り巻く社会に対する考え方、外出時の様子、外出する上での困難や不安などについて意見を収集し、子育て世代の社会に対する要望や、具体的な支援に対する優先事項を明らかにすることを目的として今回の調査を実施しました。

【ポイント】

- ◆ 調査時点(2019 年)における子育て環境に対して子育て中の親はどのように感じているのか
- ◆ 子育て中の親において、子育て環境を取り巻く状況はどのように変化したと感じられているのか(2010 年調査との比較)
- ◆ 現在の子育て環境は子育て中の親の期待に応えられるものになっているのか
- ◆ 子育て環境の満足度や子育て中の親の外出意欲に対して、どのような環境要因が影響を及ぼしているのか

(2) 調査手法

Web 調査(インターネット調査 [マイボイスコム(株)を使用])

(3) 調査エリア

全国

(4) 調査対象

- ①妊娠中もしくは出産後 3 年未満の子どもを持つ全国 18～49 歳の女性(妊娠中で子どもがいなくてもよい)
- ②上記①の条件に当てはまる女性の配偶者・パートナー 全国 18～49 歳の男性

（５）調査の実施状況

調査種別	本調査		
	<男性編>	<女性編>	
設問数	47 問（男性編・女性編共通）		
調査時期	2019 年 12 月 19 日～2019 年 12 月 24 日		
回収状況	600 サンプル	1,000 サンプル	
回収サンプルの内訳			
		男性	女性
	10・20 代	37	208
	30 代	354	668
	40 代	209	124

【参考 2010 年調査との相違】

- ◆ 調査手法：2010 年は予備調査（スクリーニング調査 サンプルサイズ 20,732）をおこなったのち、本調査を実施（サンプルサイズ 男性 228、女性 1,182）
- ◆ 調査会社：インターネット調査会社 （株）インスコープの「あぐる」を使用
- ◆ 調査票：男性回答者について、2010 年調査は「回答者の配偶者・パートナー」についての回答を求めたが、2019 年調査は「回答者自身」のことについて回答を求めた。

2. 調査回答者の概要(2019 年)

- ◆ 男女ともに 30 代が中心で、3 歳未満の子ども 1 人と同居する家庭が大半を占める(2010 年との大きな違いはない)
- ◆ 就労状況については、男性はほぼ全員が就労、女性は半数弱(2010 年調査よりも就労率は高く、正規雇用率も高い)
- ◆ 学歴が比較的高め(男性の大学院卒 15.2%)

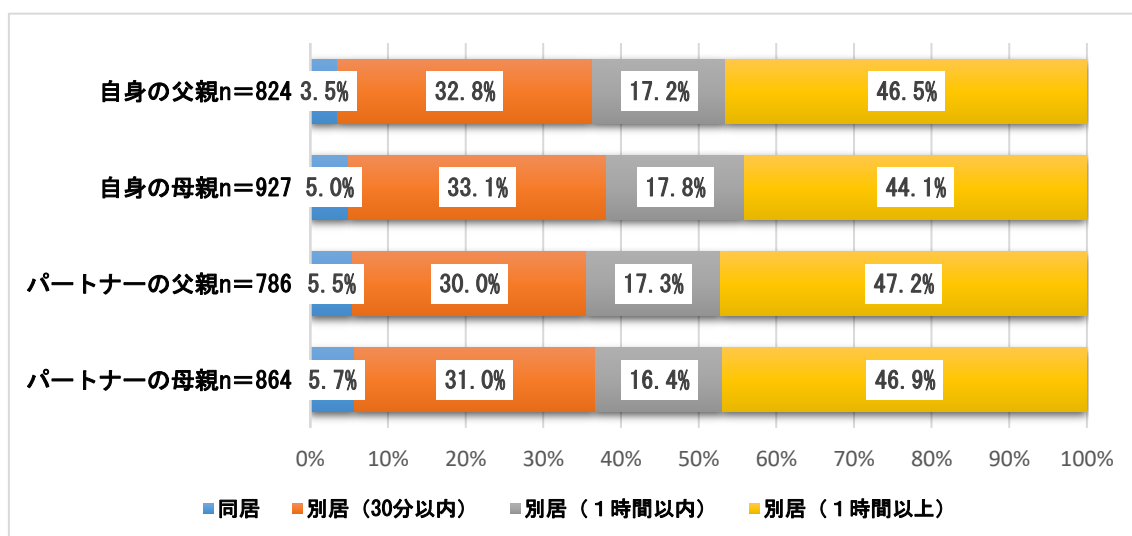
	2019 年 (男性 600、女性 1000 名)	2010 年 (男性 228 名、女性 1,128 名)
年齢構成	男女ともに 30 代中心 (男性 59.0% 女性 66.8%)	男女ともに 30 代中心 (男性 57.5% 女性 63.5%)
居住エリア	関東エリア中心 (男性 42.8% 女性 38.3%)	関東エリア中心 (男性 36.0% 女性 37.7%)
同居の子ども	男性 3 歳未満の子どものみ 93.5% 妊娠+3 歳未満の子ども 6.5% 女性 3 未満の子どものみ 89.4% 妊娠+3 歳未満の子ども 8.1% 妊娠中 2.5%	男性 3 歳未満の子どものみ 88.2% 妊娠+3 歳未満の子ども 7.5% 妊娠中 4.4% 女性 3 未満の子どものみ 89.7% 妊娠+3 歳未満の子ども 6.5% 妊娠中 3.8%
就労状況 (就労+一時的な 休業・休職)	男性 96.5% 女性 44.6%	男性 82.0% 女性 24.9% *ただし 2019 年と質問内容は異なる
就業形態(正規従 業員)	男性 89.3% 女性 56.3%	男性 69.7% 女性 13.7% *ただし 2019 年と質問内容は異なる
学歴	男性 大学院 15.2%	—

	大学 56.7% 短大・高専・専門 11.8% 中学・高校 16.3% 女性 大学院 3.1% 大学 46.5% 短大・高専・専門 31.2% 中学・高校 18.9%	
年収	男性 400～500 万円 20.7% 500～600 万円 20.2% 600～700 万円 13.2% 女性 収入なし 47.5% 100 万円未満 23.3% 200～300 万円 6.6%	—

3. 子育ての状況（2019 年の女性回答から）

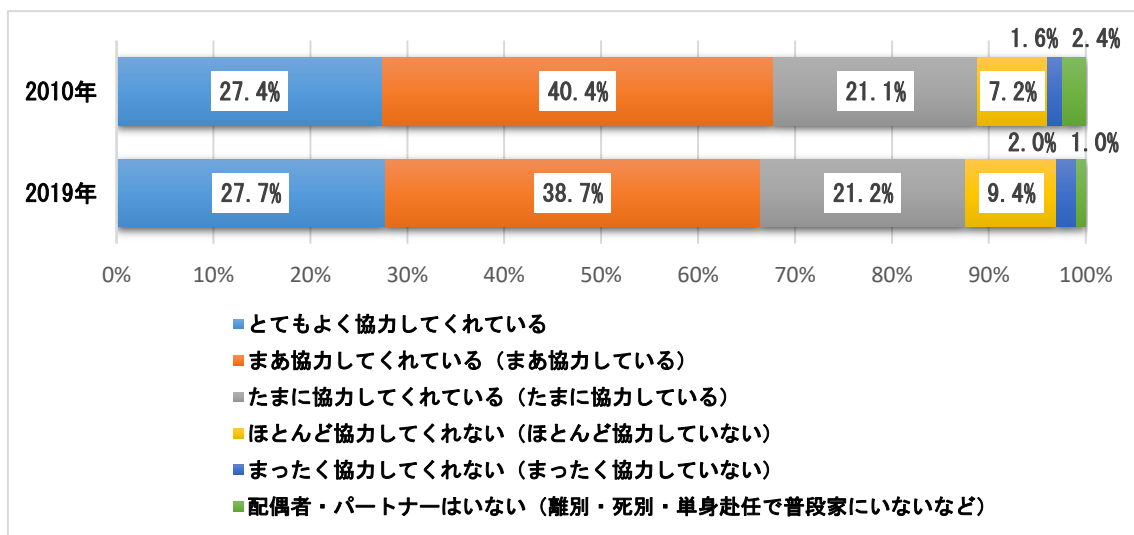
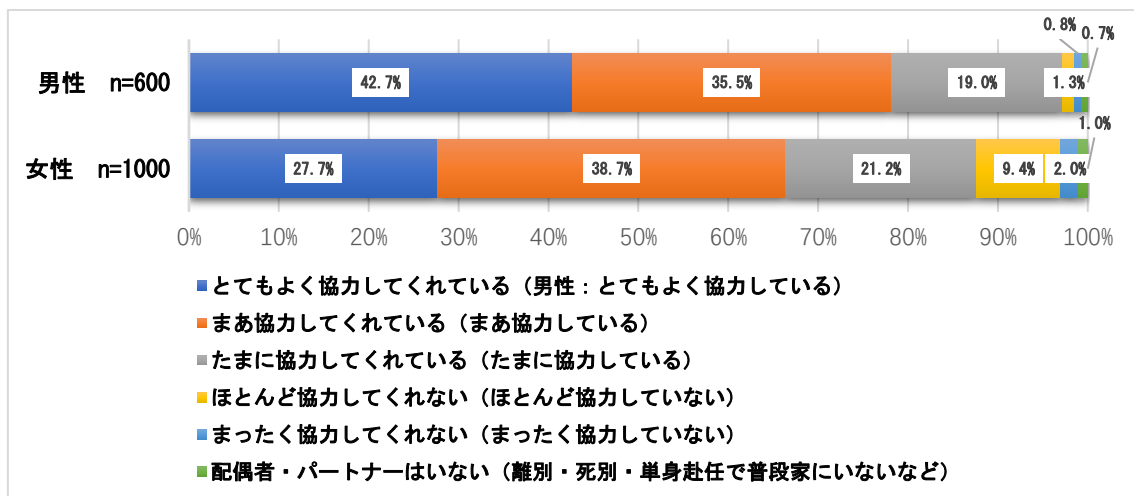
（１）祖父母との同別居状況

実の親や配偶者・パートナーの親との同居比率は低く、核家族が中心である。ただし、近年は近居が増える傾向にあり、本調査対象者においても 3 割強が 30 分以内で移動できるところに近居する状況であった。



（２）配偶者・パートナーの子育て協力状況

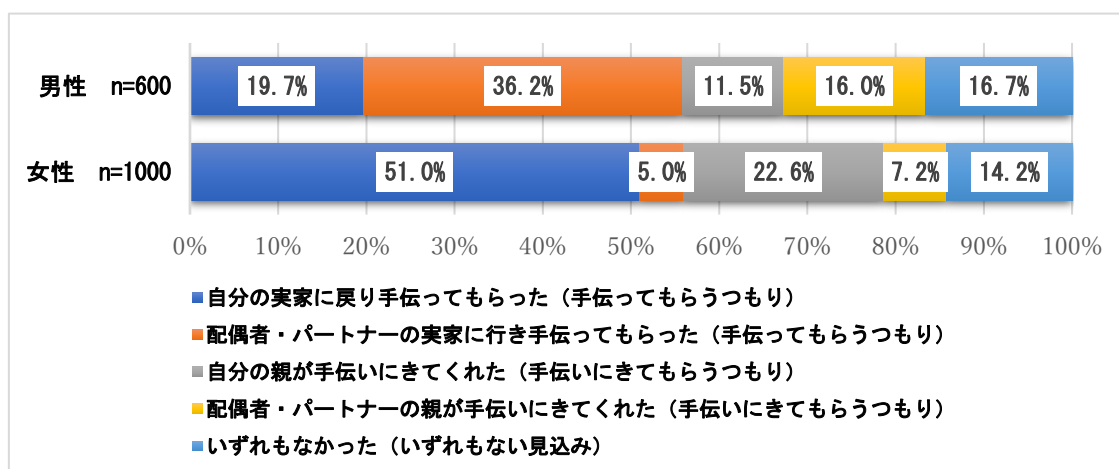
配偶者・パートナーの子育て協力状況について、女性(母親)の見方によれば、約 3 割の配偶者・パートナーは「とてもよく協力してくれている」状況にあり、「まあ協力してくれる」とあわせて約 7 割に達している。この配偶者・パートナーの子育て協力状況は 2010 年も同様の傾向である。また、男性自身が考える子育てへの協力状況は女性の見方よりもかなり高く、この傾向も 2010 年調査と同様である。



(3) 子育て支援ネットワーク

① 出産前後の祖父母の支援

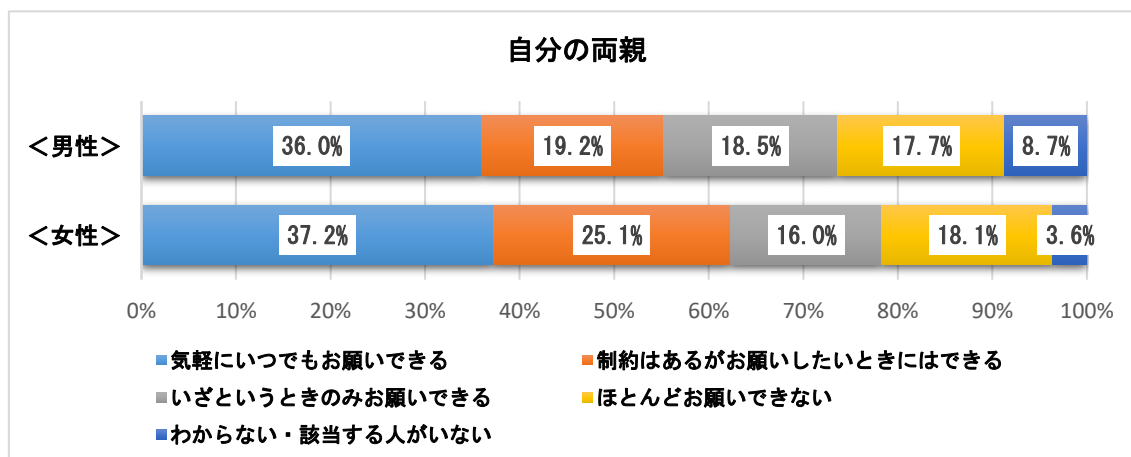
出産前後の祖父母世代の支援について、女性は実の親から支援を受ける割合が高い(73.6%)。一方で、7人に1人くらいは出産前後でいずれの祖父母の支援を受けず、女性あるいは夫婦で出産前後の対応を行っている状況にある。

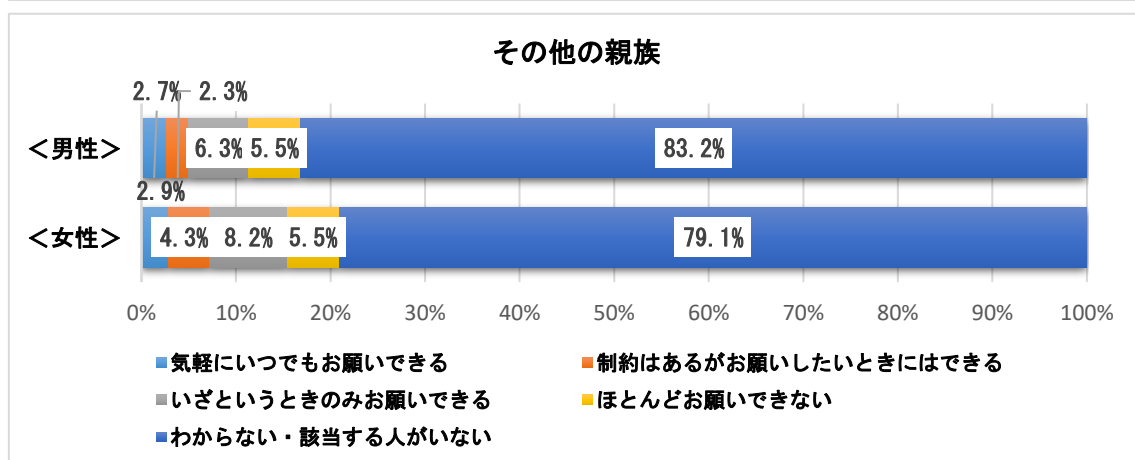
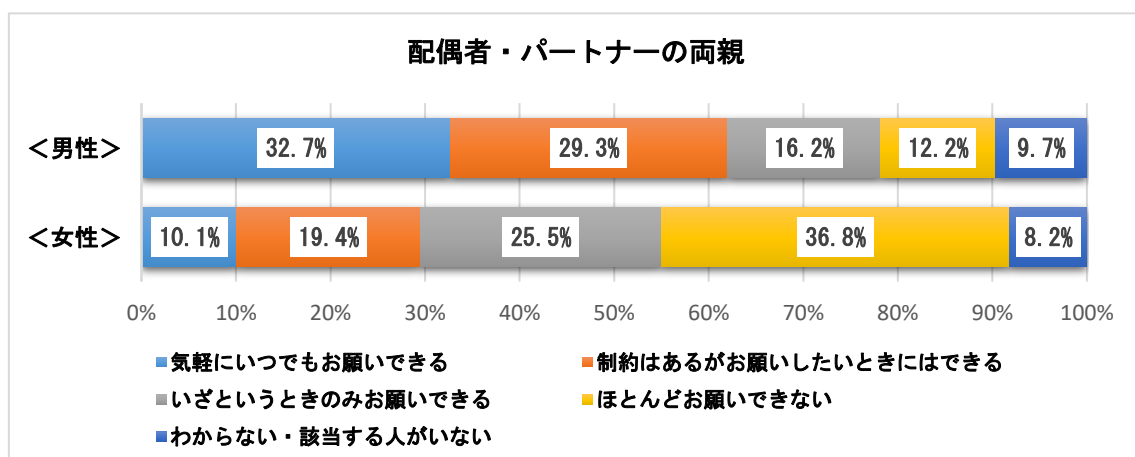


② 日頃の子育て支援

【家族・親族】

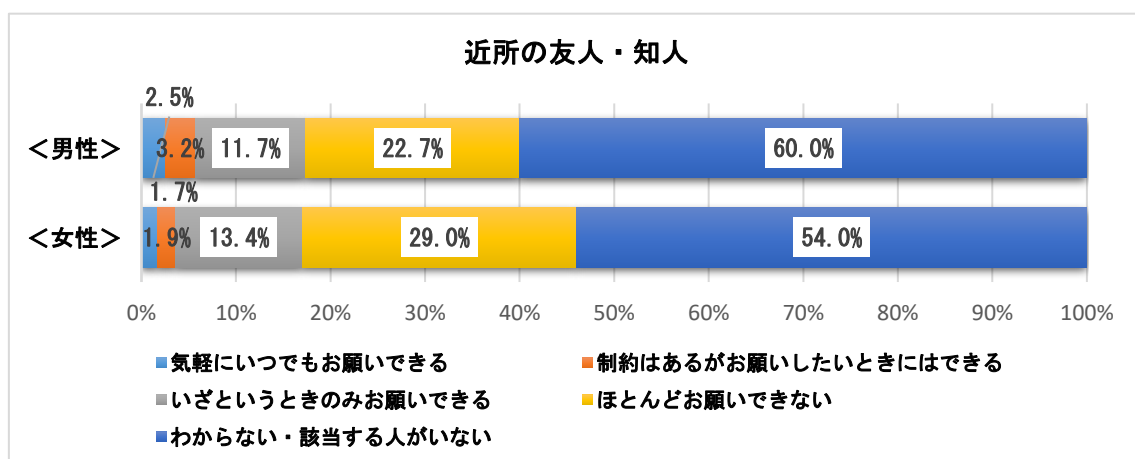
男女ともに日頃から子育て支援者として主に頼れる相手は「自分の両親」。ただし「配偶者・パートナーの両親」について、男性は「自分の両親」と同程度に頼れるが、女性は「いざというときに」お願いできる間柄である。親以外の親族(きょうだいなど)では、「わからない・該当者がいない」とする回答が多く、親以外の親族の子育て支援ネットワークは乏しいようである。

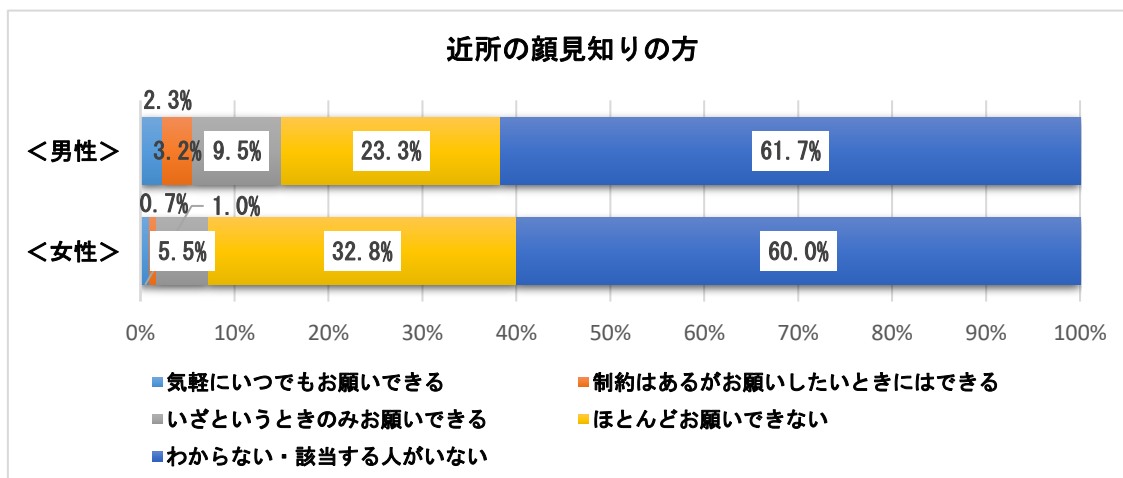




【知人・友人】

近所の友人・知人、顔見知りについても「わからない・該当する人がいない」の回答がもっとも高いが、「ほとんどお願いできない」が女性で3割近くになっている。近隣に知り合いはいても、子育て支援までをお願いできる関係性にある人は少数にとどまっているようである。



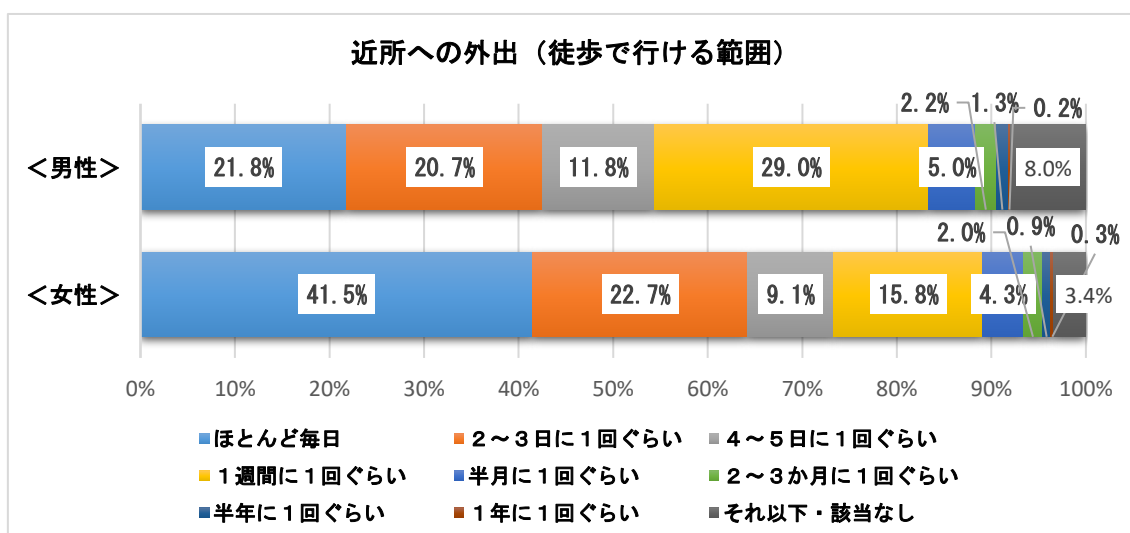


II 2019 年の主な結果～男女の違いに着目して

1. 主な外出先と移動方法

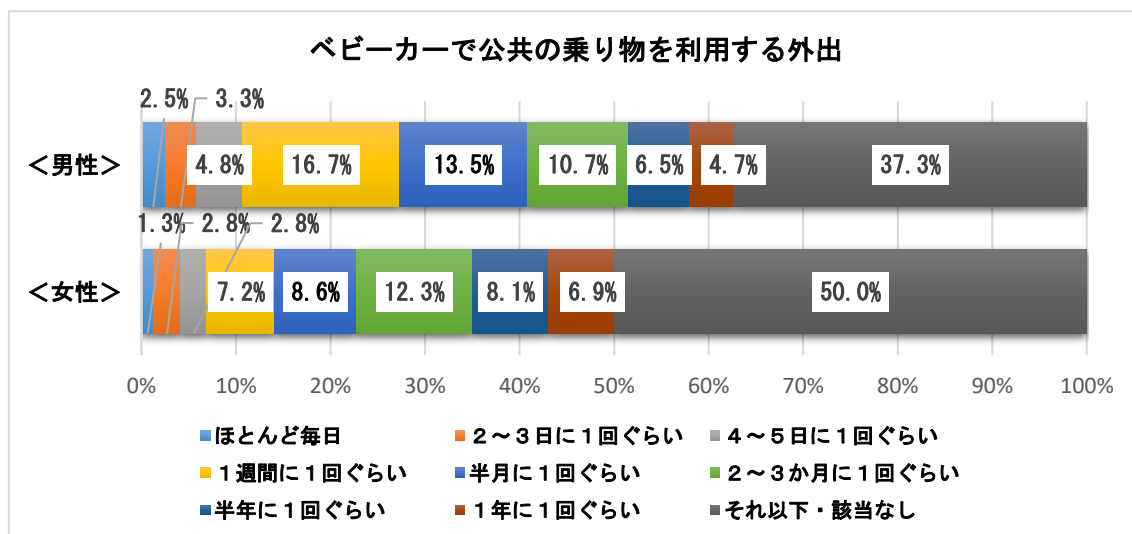
① 外出先と外出頻度

子ども連れでの女性の外出頻度は、徒歩で行ける範囲の近所への外出頻度がもっとも高い。日常の買い物や子どもを遊ばせるために出かけていると考えられる。



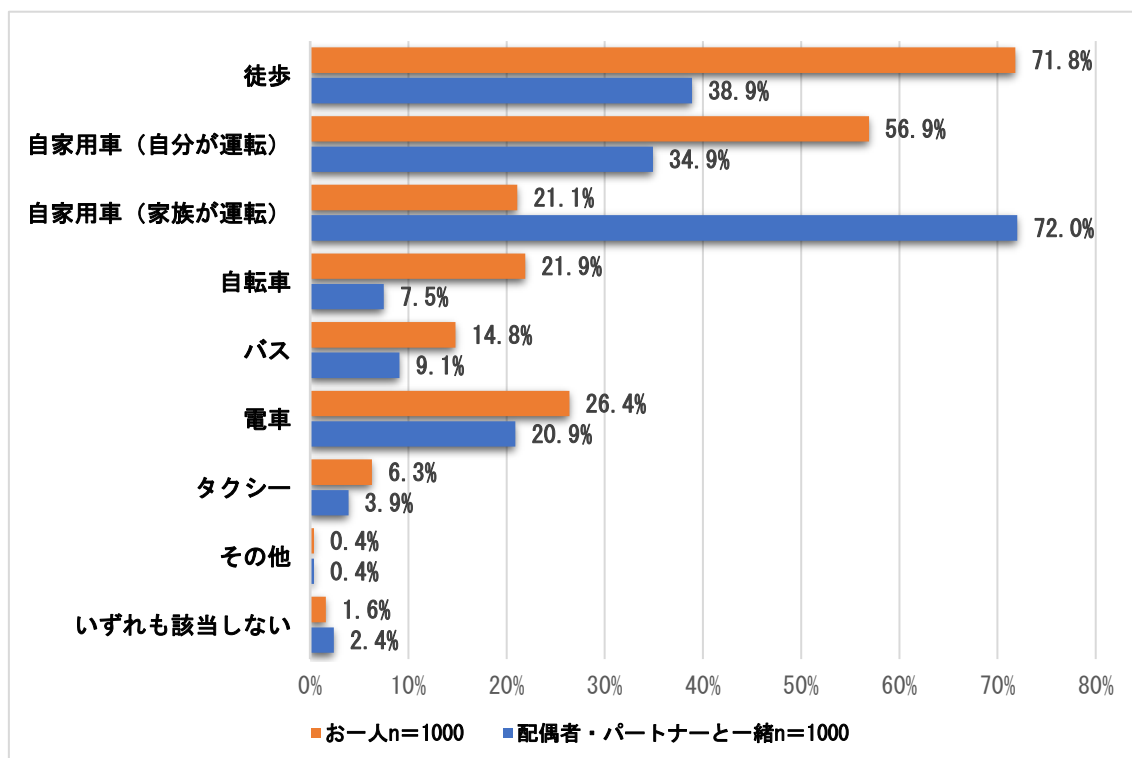
近年話題になるベビーカーでの公共の乗り物を使った外出については、「ほとんど利用しない」割合が女性で 50%で、「2～3 か月に 1 回ぐらいの利用」がもっとも多い(12.3%)など、実際の頻度は

あまり高くない。



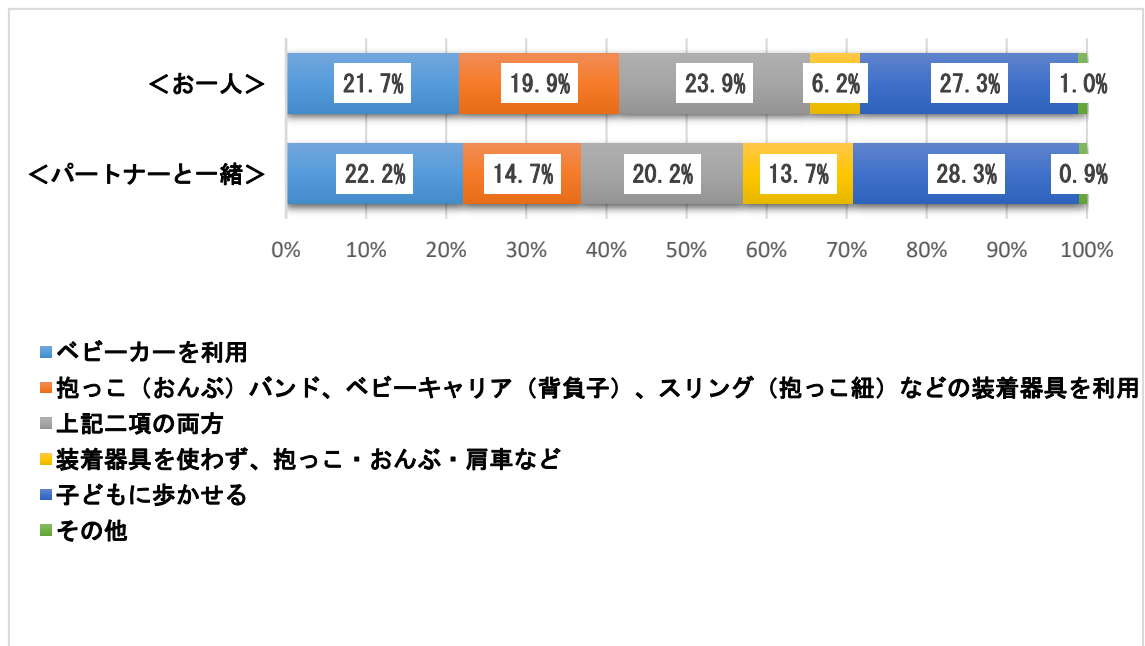
② 移動方法

女性が外出時に利用する主な移動方法は「徒歩」か「自家用車」である。ただし、配偶者・パートナーと一緒にいる場合は「自家用車」が多い。一人の場合と配偶者・パートナーと一緒にいる場合では、外出先が異なるためと考えられる。



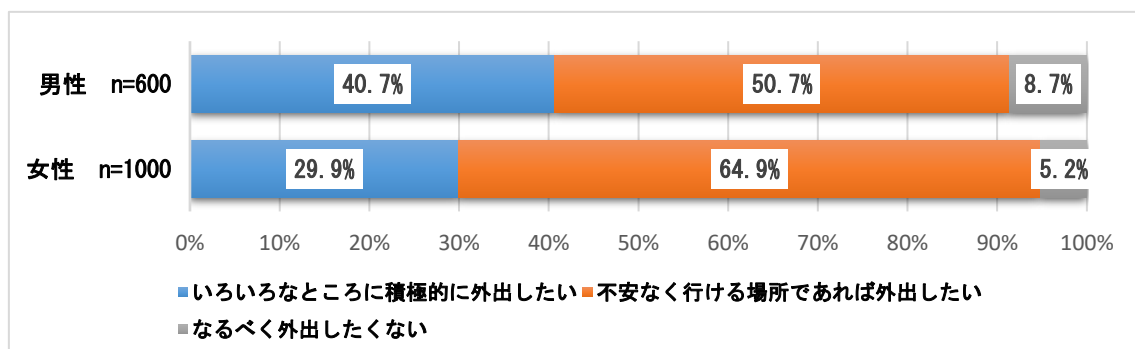
③ 移動手段

女性が子どもと外出する際の移動手段は「子どもに歩かせる」「ベビーカーを利用」する割合が高い。子どもの年齢によって移動手段は変わる。

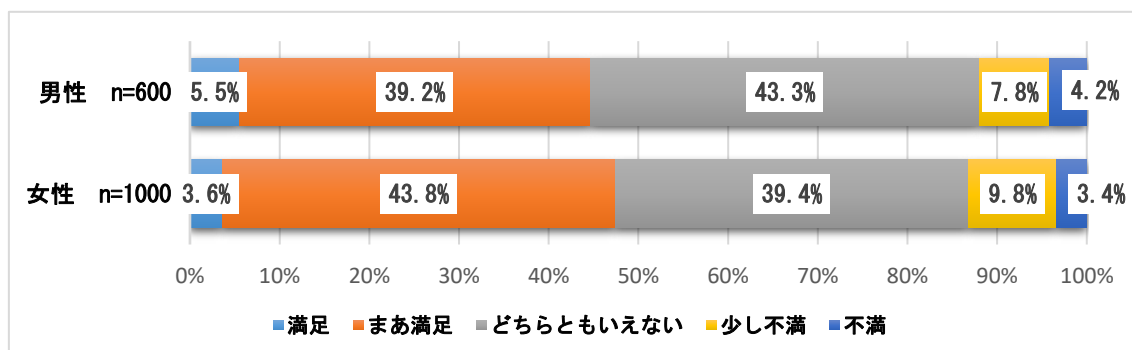


2. 外出意欲と外出先満足度

外出意欲については男性のほうが「いろいろなところに積極的に外出したい」と考える割合が高く、女性は「不安なく行ける場所であれば外出したい」の割合が高い。女性は男性よりも外出時の不安をより多く抱えているようである。

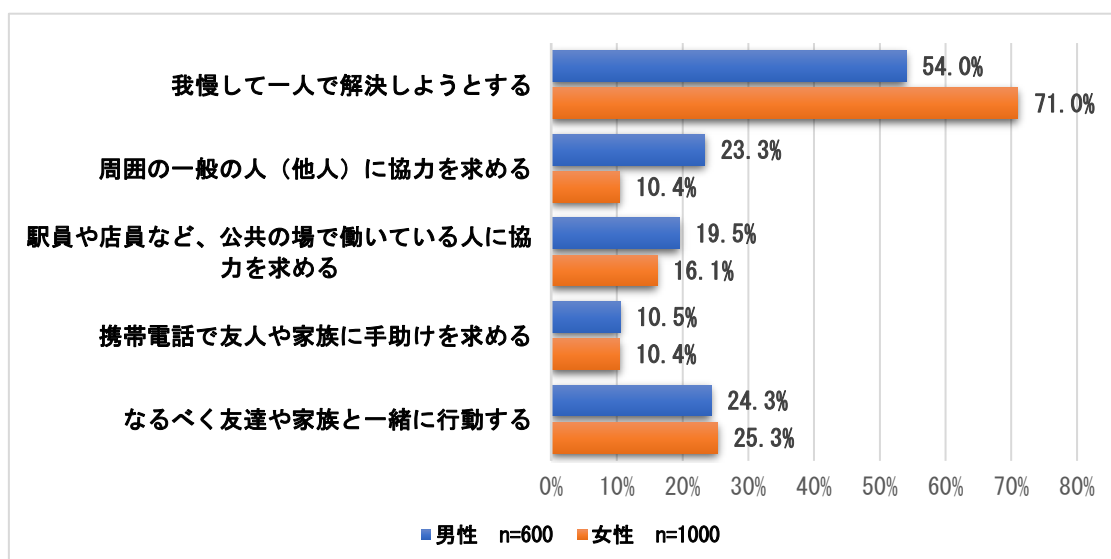


外出環境への満足度について、男女では外出先や外出頻度に相違はあるが、全体的な満足度において大きな相違はない。



3. 外出先で困難を感じた場合の対応

外出先で自分一人では対処できない状況が生じた場合の対応には男女で相違がある。女性は男性に比べて、一人で解決しようとする傾向があり、助けを求める場合もその相手は友人・家族といった親しい関係にある人である。女性のほうが外出時により大きな負担感を抱えていると考えられる。

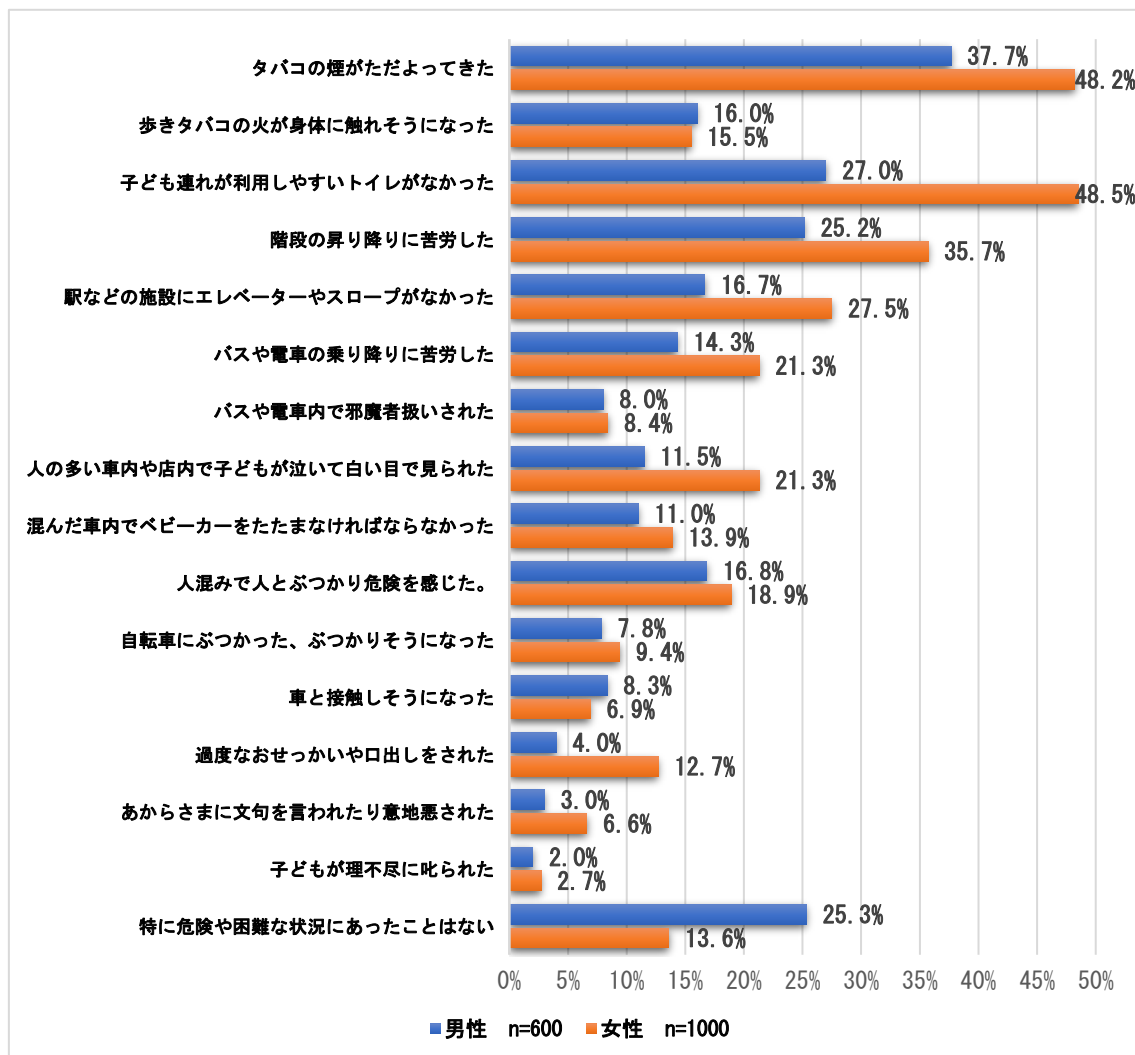


4. 外出時の体験

① 危険・困難

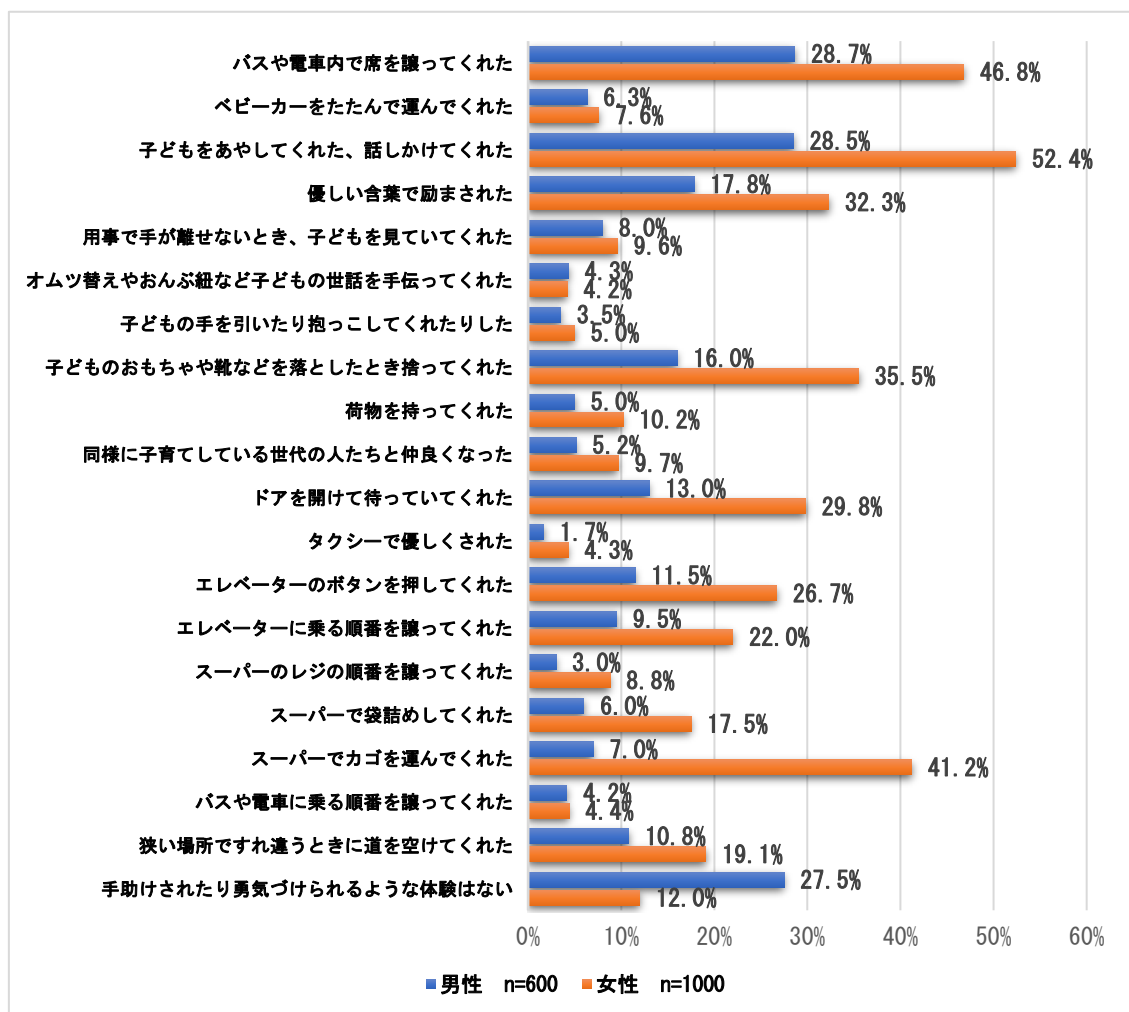
外出先で遭遇した困難経験については、多くの項目において女性が男性よりも多くの困難を経験している。まず、物理的な困難としては、「子ども連れが利用しやすいトイレがない」「階段の昇り降りに苦労した」「駅などの施設にエレベーターやスロープがなかった」「バスや電車の乗り降りに苦労した」があげられる。非力な女性が子どもを連れて、また、ベビーカーなどを利用している場合にはスムーズな移動が難しいことを表している。

また、対人面での困難として「人の多い車内や店内で子どもが泣いて白い目で見られた」「過度なおせっかいや口出しをされた」についても女性の割合が高い。「子育ては母親が行うもの」といった社会規範が男性以上に母親の責任を問う風潮を生み出していると考えられる。



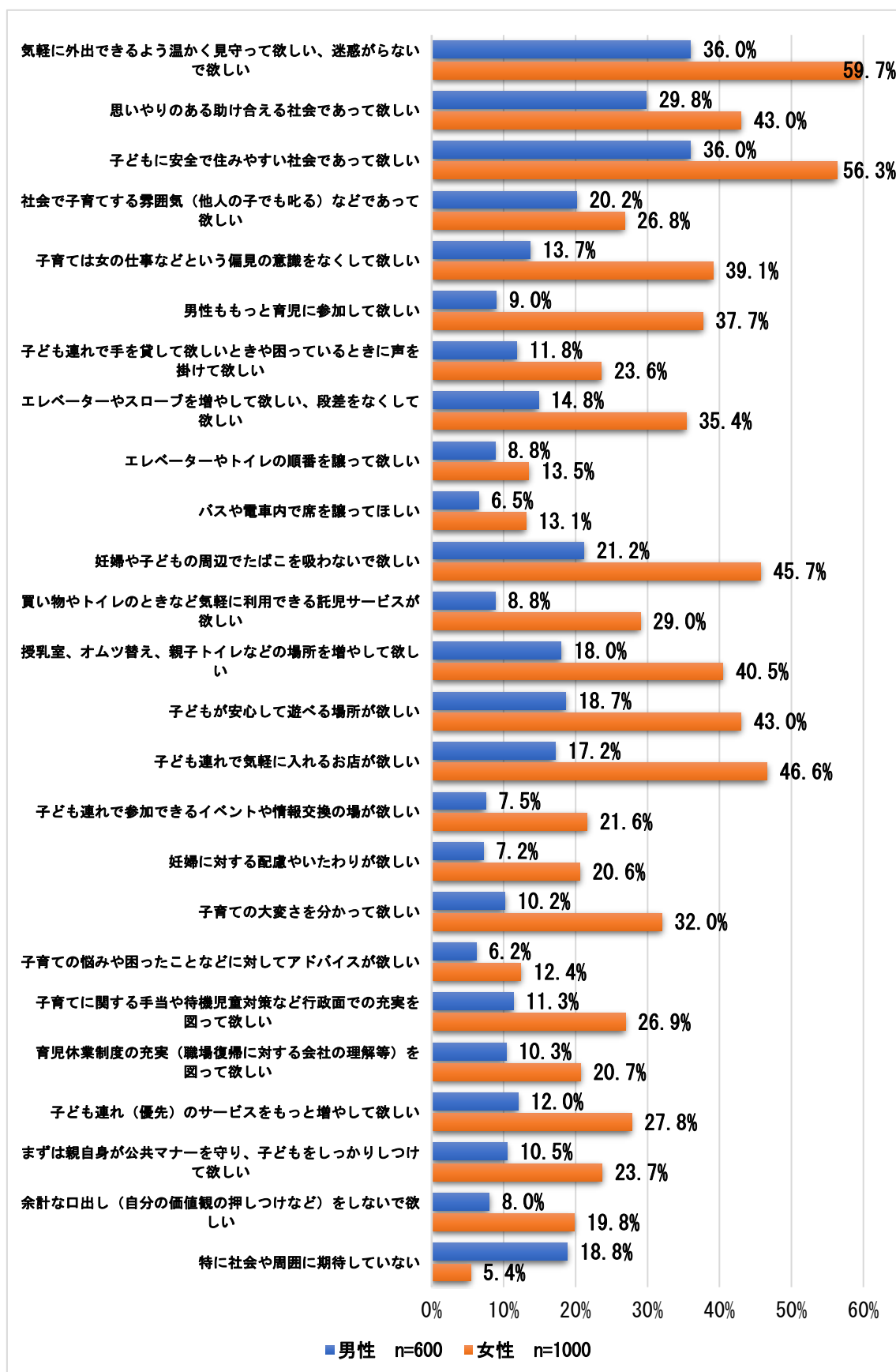
② 嬉しかった経験

嬉しかったり勇気づけられた経験についても、ほぼすべての項目で女性の経験率が男性を上回った。「バスや電車で席を譲ってくれた」「スーパーでカゴを運んでくれた」「子どものおもちゃや靴などを落としたとき拾ってくれた」などの実質的な負担軽減に関わる経験に加え、「子どもをあやしてくれた、話しかけてくれた」「優しい言葉で励まされた」といった子ども連れの外出を受容する他者の声がけについても女性の経験率が高い。女性はそもそも子どもと外出する(せざるを得ない)機会が多く、社会との接点が多い。それにともない、良い経験も良くない経験の積み重ねも多くなるのであろう。



5. 周囲や社会への期待

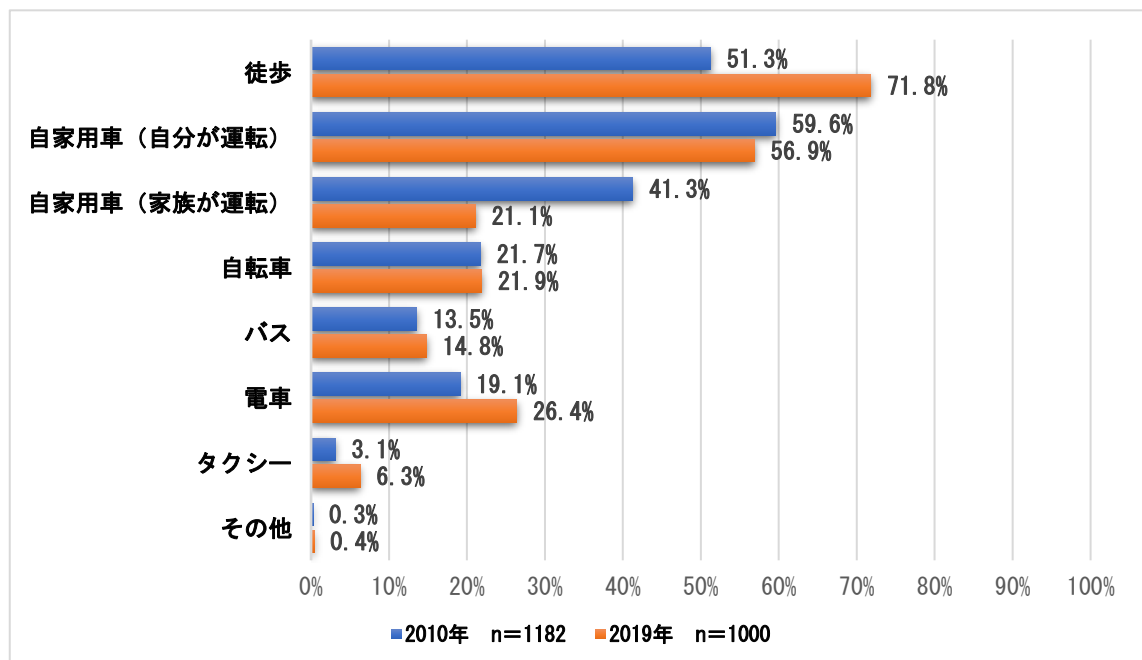
子ども連れの外出における周囲や社会への期待についても、女性は男性以上に高い期待を抱いている。期待する内容は、「気軽に外出できるよう温かく見守って欲しい、迷惑がらないで欲しい」に代表される「子ども連れの親子を受容する態度」、「子どもに安全で住みやすい社会であって欲しい」「妊婦や子どもの周辺でたばこを吸わないで欲しい」といった「外出時の安全確保」、「子ども連れで気軽に入れるお店が欲しい」「子どもが安心して遊べる場所が欲しい」といった「子どもが自由に振舞える空間」、「授乳室、オムツ替え、親子トイレの場所を増やして欲しい」「エレベーターやスロープを増やして欲しい、段差をなくして欲しい」という「外出先や移動時のストレスを低減させる物理的環境」、そして「子育ては女の仕事などという偏見の意識をなくして欲しい」「男性ももっと育児に参加して欲しい」といった「男女の共同養育への期待」に分類される。



Ⅲ 主な結果 2019 年調査と 2010 年調査の女性間比較

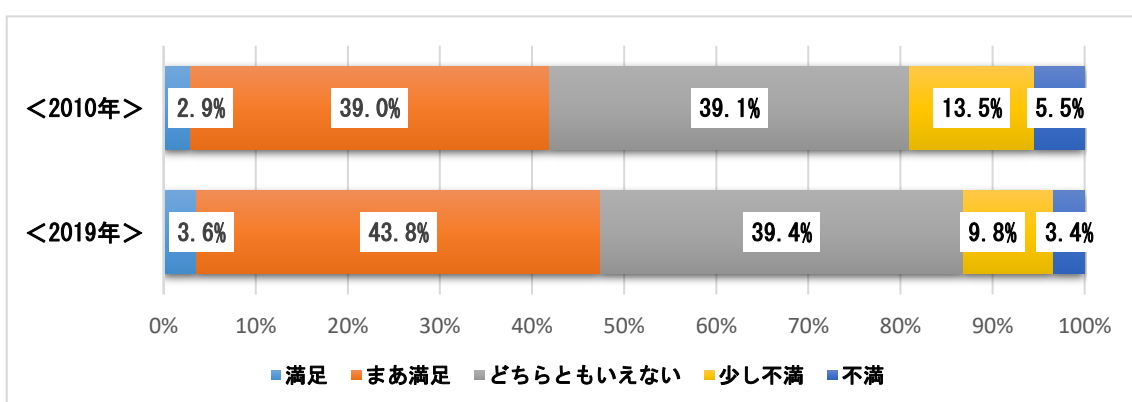
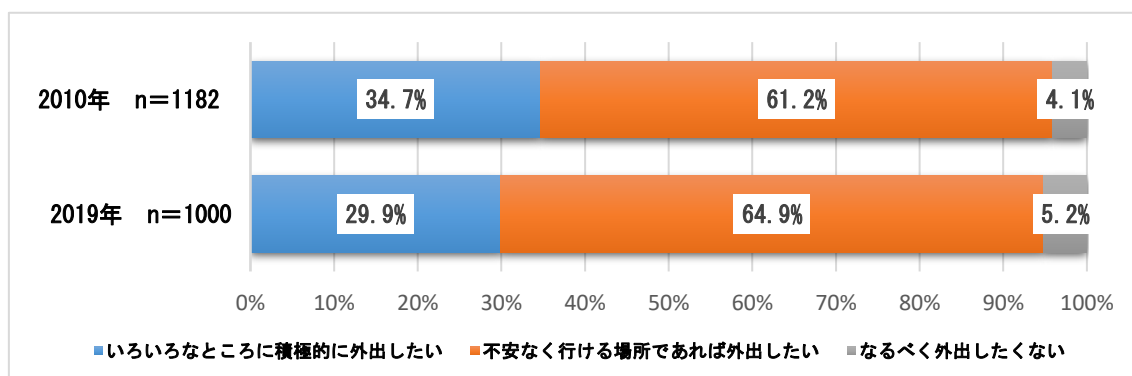
1. 移動方法

子ども連れで外出する際の移動方法として、2019 年は 2010 年に比べて徒歩と電車移動が多く、代わりに家族が運転する自家用車での移動は少ない。これは、この 2 時点間で「徒歩で行ける範囲の近所への外出頻度」に違いはないが、少し離れた街中への外出や日帰り程度の外出の頻度が 2019 年のほうがやや少ないためと考えられる。



2. 外出意欲と外出先満足度

外出意欲については、「いろいろなところに積極的に外出したい」が 2019 年でやや少なく、「不安なく行けるところであれば外出したい」が若干高い傾向がある。一方で、外出先満足度は 2019 年で「満足」「まあ満足」が 2010 年よりも高い。積極的な外出意欲はやや弱まったものの、外出した場合の満足度は高まっている様子がうかがえる。

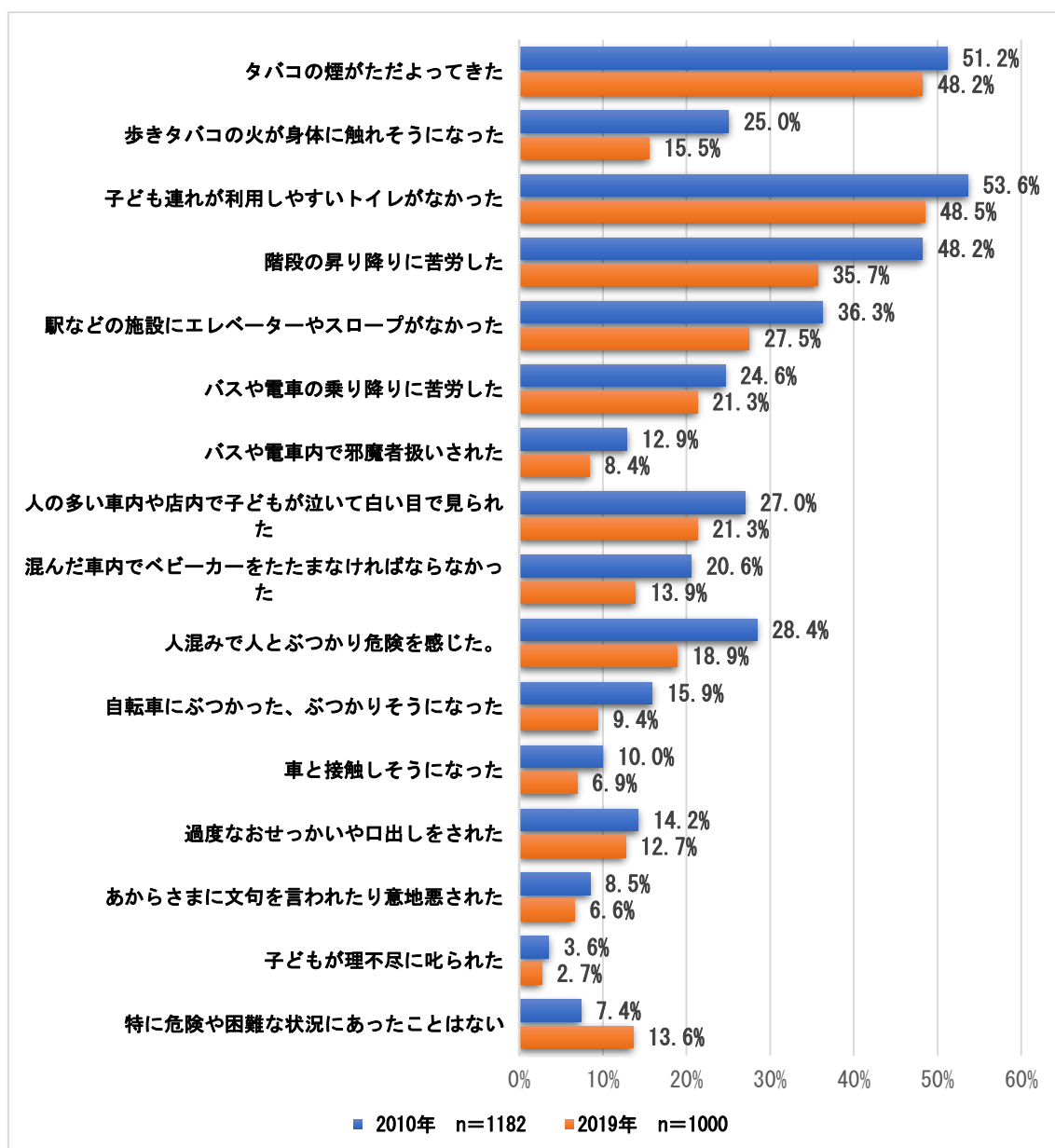


3. 外出時の体験

① 危険・困難経験

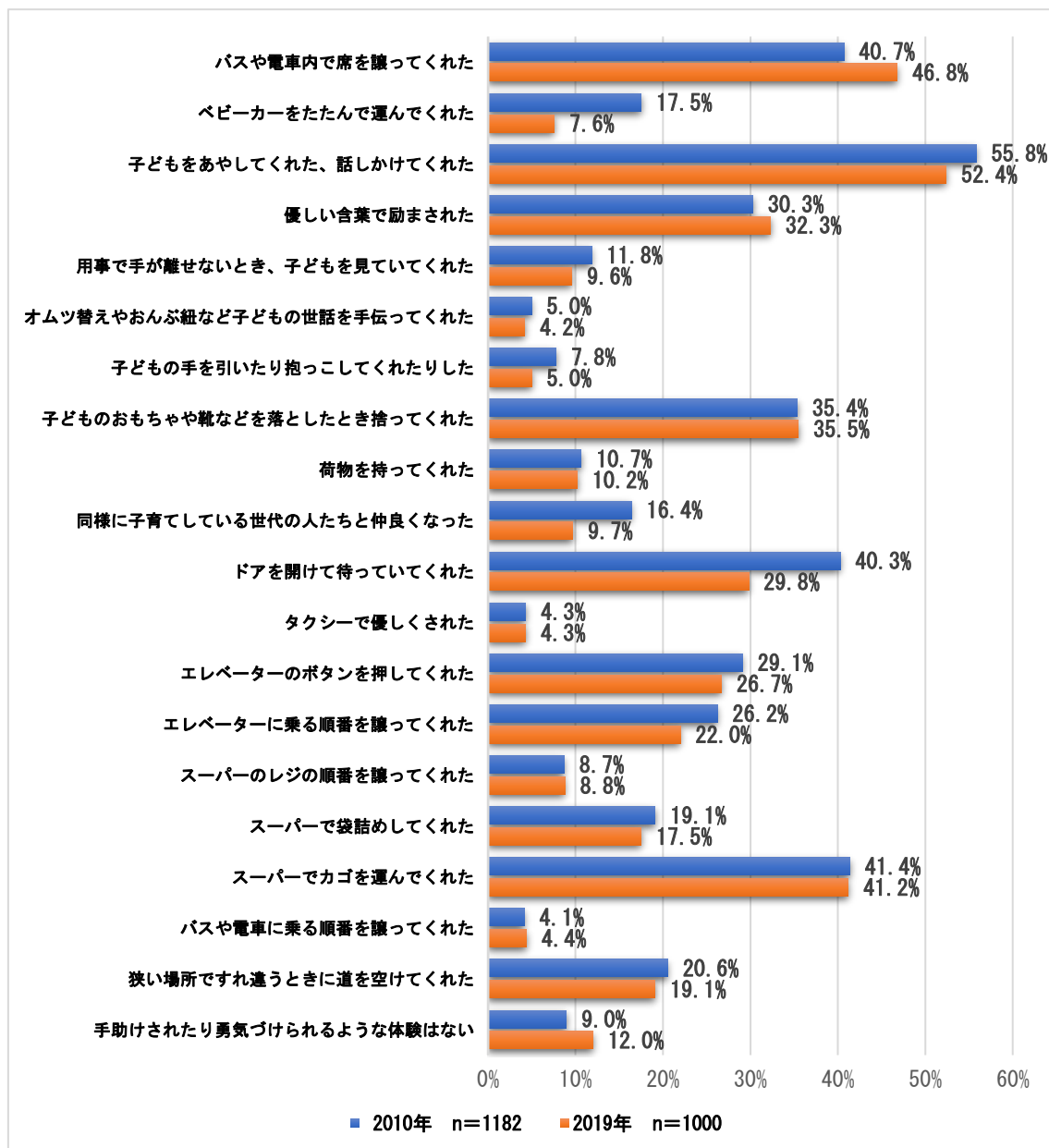
外出時に経験した危険・困難については、「特に危険や困難な状況にあったことはない」の割合が2019年に高いなど、全体的に2019年は2010年よりも低い割合を示し、女性が外出時に危険や困難を感じる機会は少なくなっていると考えられる。たとえば「階段の昇り降りに苦労した」「駅などの施設にエレベーターやスロープがなかった」「人混みで人とぶつかり危険を感じた」などの割合は2時点で大きな違いがあり、これは街中のバリアフリー化や都市や駅の再開発が進んでいることによる影響と考えられる。

また、「バスや電車内で邪魔者扱いされた」「人の多い車内や店内で子どもが泣いて白い目で見られた」といった親子連れの外出を受容する態度にも若干ながら好転する兆しもみられ、女性たちが外出時に心理的なストレスも感じにくくなっているようである。



② 嬉しかったり勇気づけられた経験

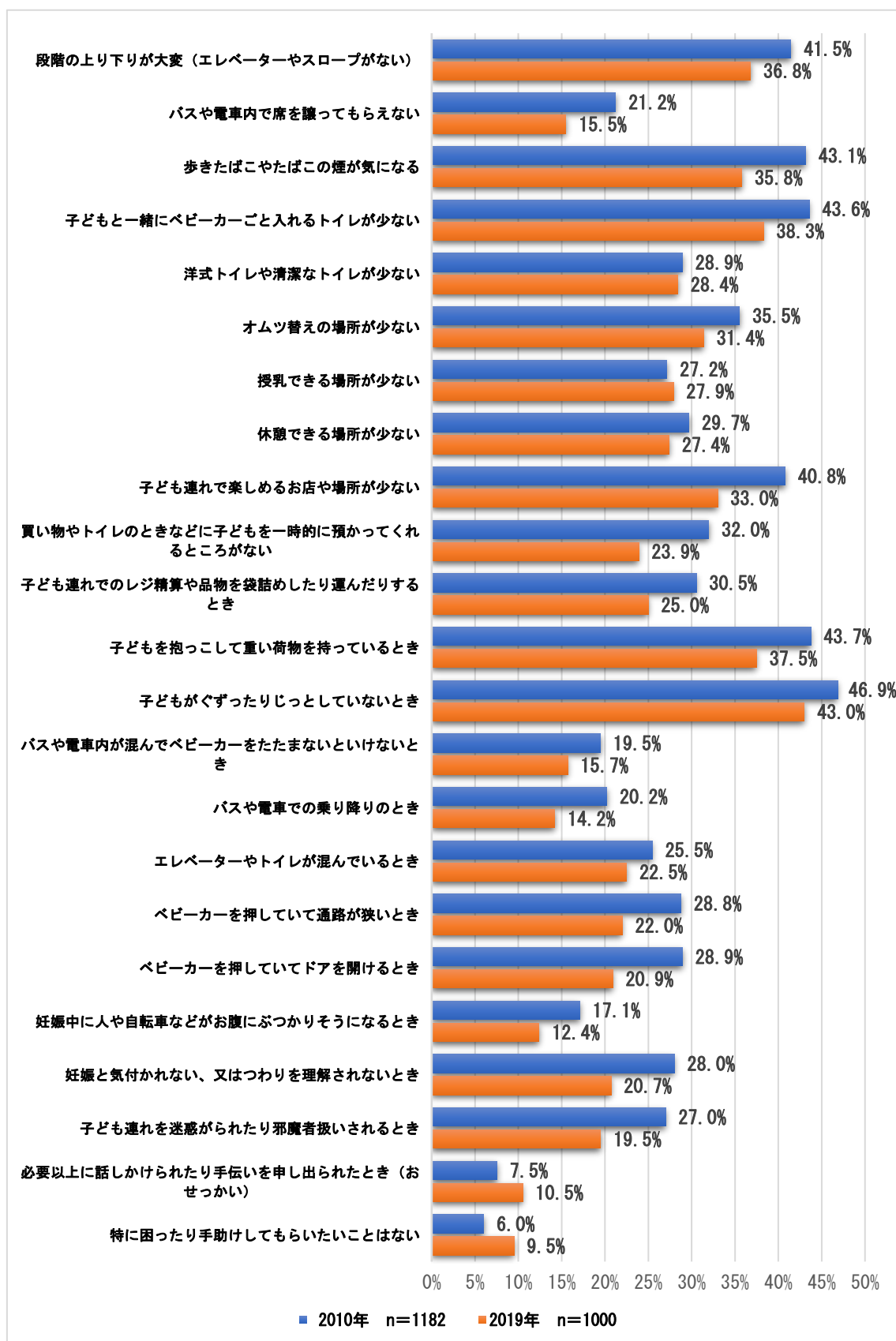
嬉しかったり勇気づけられた経験について、「バスや電車内で席を譲ってくれた」の割合は 2019 年で高く、妊婦や子ども連れの身体面の負担を減らそうという行為は社会の中に定着しつつあるようである。一方で、子どもをあやしてくれたり優しい言葉で励ますといった情緒的な思いやり行為については 2019 年と 2010 年ではほとんど変わっていない。



4. 外出時の困りごと・助けてもらいたいこと

外出時の困りごと・助けてもらいたいことについても、2019年の割合は2010年よりも総じて低く、子ども連れの外出における社会的な支援は向上しているようである。具体的には「階段の昇り降りが大変」「子どもと一緒にベビーカーごと入れるトイレが少ない」「オムツ替えの場所が少ない」「子ども連れで楽しめるお店や場所が少ない」「買い物やトイレのときなどに子どもを一時的に預かってくれるところがない」といった項目の割合は2019年のほうが低い。物理的な面での困りごとは減り、また子ども連れが周囲に遠慮せずに行動できる場所も確保されつつあるようである。

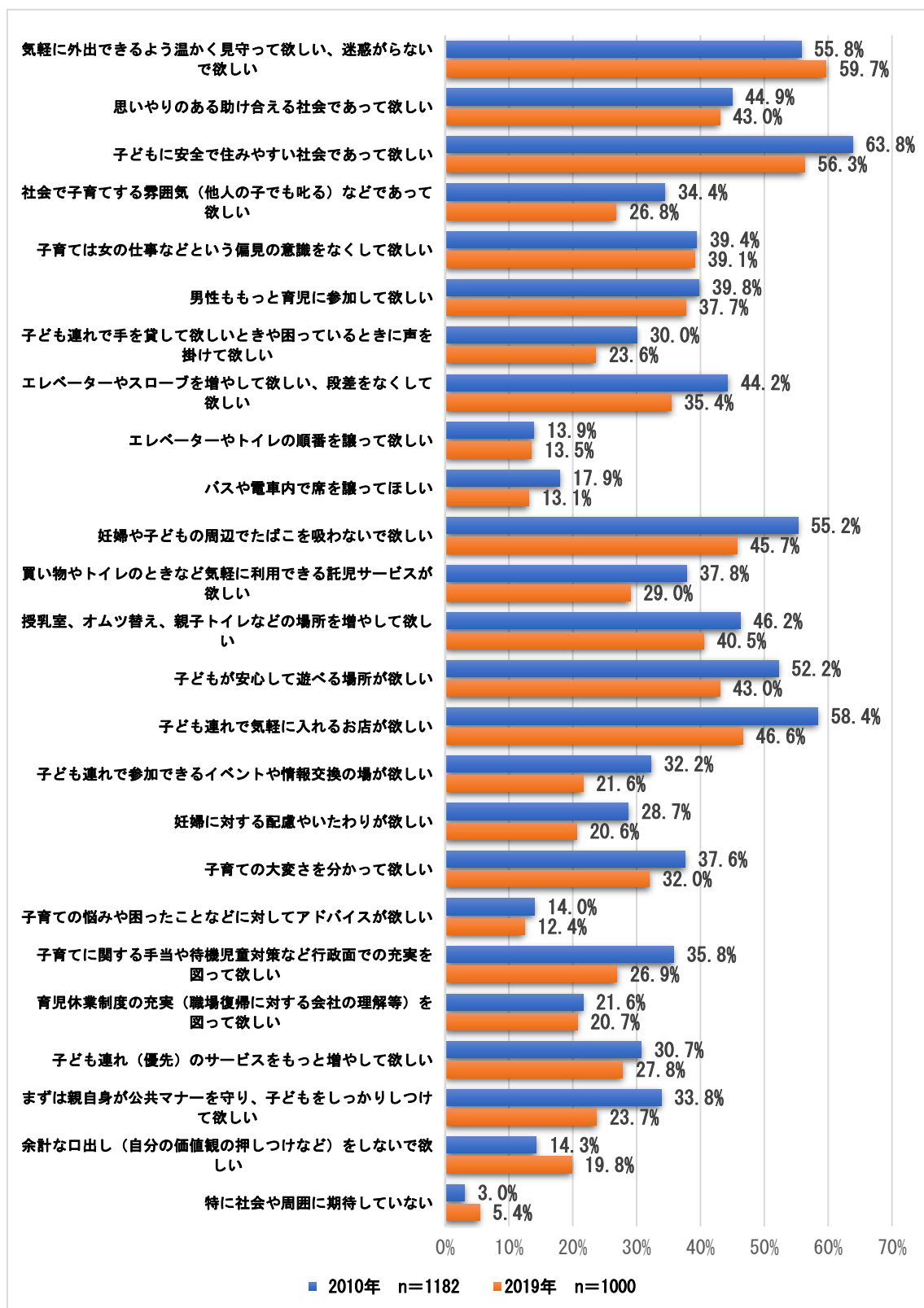
また、「子ども連れを迷惑がられたり邪魔者扱いされるとき」の割合も低下していることから、子ども連れの外出を受け入れる雰囲気醸成される方向にあることと、子どもが楽しめるお店や場所が増えることによって、大人だけの外出と子ども連れの外出を無理なく分離できる環境が整うことによって、両者の衝突が起こりにくくなっているとも解釈できる。



5. 周囲や社会への期待

子ども連れの外出における周囲や社会への期待についても、多くの項目で 2019 年は 2010 年よりも低い値を示しており、この 9 年間で女性たちの周囲や社会への見方が変わってきていることが確認できる。具体的には、「子どもに安全で住みやすい社会であって欲しい」「妊婦や子どもの周辺でたばこを吸わないで欲しい」といった「外出時の安全確保」の面、「気軽に外出できるよう温かく見守って欲しい、迷惑がらないで欲しい」に代表される子ども連れの親子を「受容する態度」、「子ども連れで気軽に入れるお店が欲しい」「子どもが安心して遊べる場所が欲しい」といった「子どもが自由に振舞える空間」の確保、「授乳室、オムツ替え、親子トイレの場所を増やして欲しい」「エレベーターやスロープを増やして欲しい、段差をなくして欲しい」という「ストレスを生む物理的環境の改善」は進んでいるようである。

しかしその一方で、「子育ては女の仕事などという偏見の意識をなくして欲しい」「男性ももっと育児に参加して欲しい」といった「男女の共同養育」への期待については、2019 年も 2010 年も同水準である。また、「気軽に外出できるよう温かく見守って欲しい、迷惑がらないで欲しい」については 2019 年の回答が 2010 年を上回っていることから、子ども連れを受容する社会であって欲しいという女性たちの期待には、まだ十分にこたえられていないと考えられる。

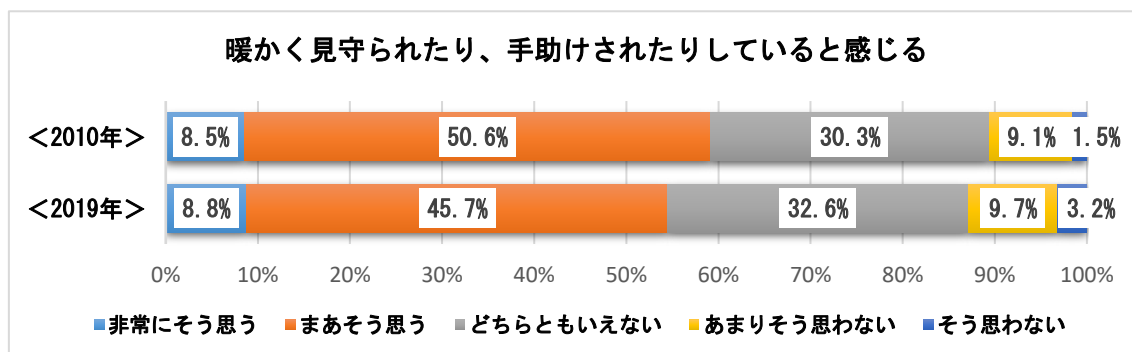


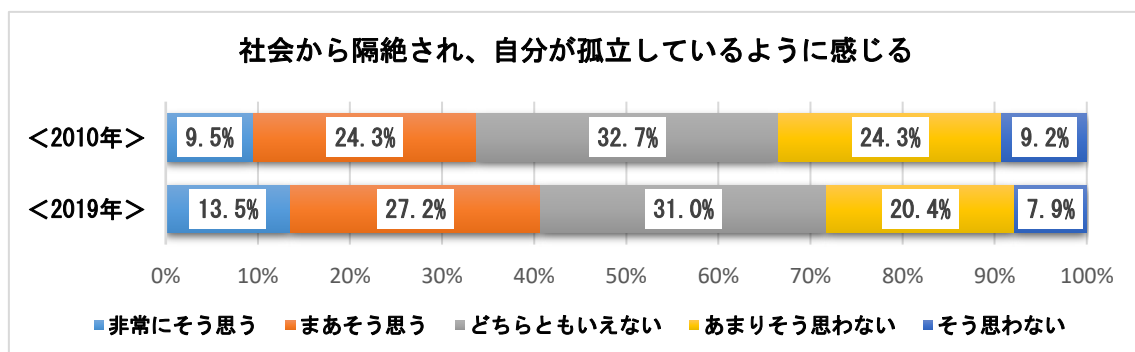
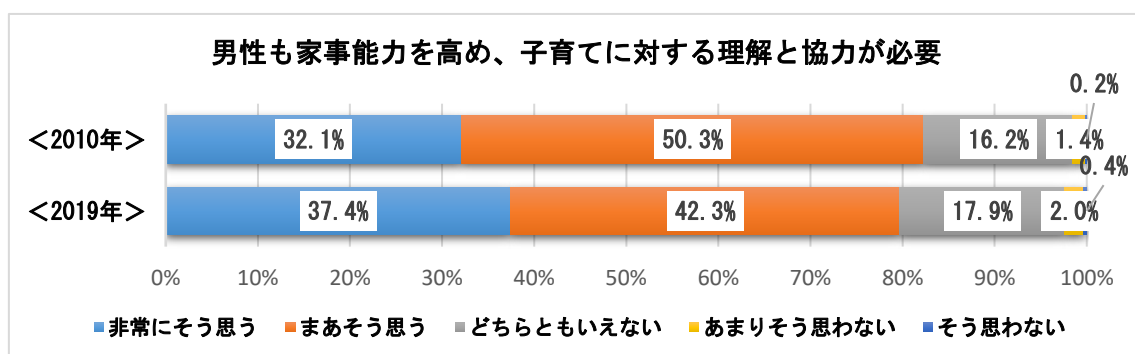
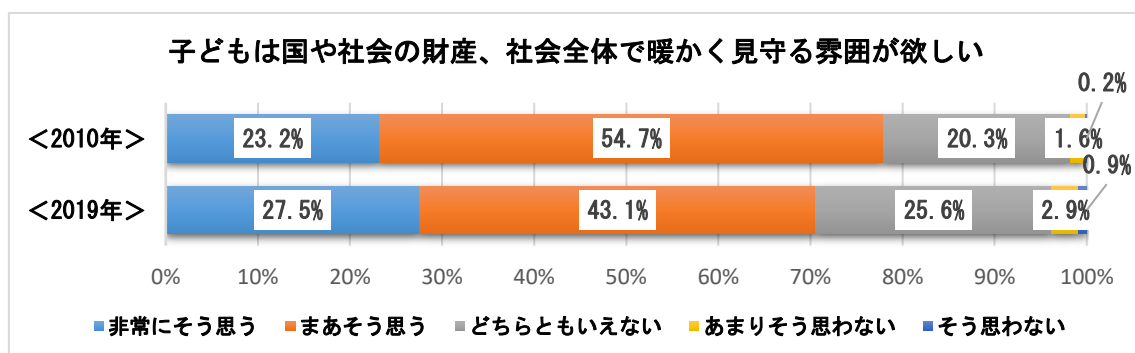
6. 子育てにおける周囲や社会環境に対する評価

子育て全般に対する周囲や社会環境に対する評価について、特徴的な質問に着目して2019年と2010年の違いを見ていく。まず「暖かく見守られたり、手助けされたりしていると感じる」割合において、2019年のほうが「そう思う」割合が若干低く、代わりに「どちらともいえない」や「そう思わない」割合が高くなっている。「子どもは国や社会の財産、社会全体で暖かく見守る雰囲気」が欲しい」についても「非常にそう思う」「まあそう思う」の割合が多数を占め、一般論としても、自分事として考えた場合にも、社会が子育てを応援してくれていると、女性たちはまだ十分に実感できていないようである。

このような評価の背景には、これまでの分析で見てきたような外出時の子育て環境における物理的・心理的なストレスの影響とは別に、男女の共同養育がまだ十分に行われていないという意識（「男性も家事能力を高め、子育てに対する理解と協力が必要」についての支持は大変高い）や、子育てをする女性たちの孤立感（「社会から隔絶され、自分が孤立しているように感じる」はそう思う割合が2019年で高い）といった子育てネットワークのせい弱さも影響を及ぼしていると考えられる。

日本の子育てをする女性は子育ての支援を受けたい相手として配偶者・パートナーと祖母（特に自分自身の母親）を念頭に置いている。また、子育てで困難が生じた場合でも、家族以外の他者に頼ろうとしない傾向がある。それに関わらず、肝心の配偶者・パートナーの育児関与はまだそれほど進んでいない。その結果、女性たちが世間や社会からの圧力を一心に受けることになり、「子育てを見守ってもらえている」という社会への信頼を生み出せずにいるのではないかと考えられる。





7. まとめ

以上の通り、2019 年に実施した調査結果について、男女の違いと 2010 年調査との傾向の違いについて述べてきた。以下に、結果の整理と結論を示す。

① 結果の整理

◆ 女性たちの子育て支援環境・ネットワーク

- もっとも頼りたい相手は「配偶者・パートナー」。ただし、この 9 年間で子育て協力が進んでいる様子は見られない
- 女性たちの強い意識にあるのは「男女共同養育」
- 実の母親(祖母)が支援の主たる担い手。出産前後および日頃の支援ともに実の親に

頼る傾向

- 友人・知人、近所に頼れるケースはあまり多くない

◆ 子ども連れの外出状況

- 近所への徒歩外出が主。公共の交通機関を利用した外出は相対的に頻度が低い
- 外出頻度は 2010 年よりも減る傾向。IT 環境の進展、スマートフォンの普及などが影響している可能性

◆ 外出意欲と外出先満足度

- 女性は男性よりも積極的な外出意欲が低く、多くの不安を抱えている
- 女性は 2010 年に比べて積極的な外出意欲はやや低下も、外出先満足度はやや上昇

◆ 外出時の危険・困難経験

- 女性は男性よりも多くの危険・困難経験をしている
- 主な危険・困難経験は子ども連れのスムーズな行動や移動を妨げる物理的な環境（トイレ、階段、公共交通機関の乗降など）
- 対人ストレスも多い（世間の白い目、おせっかい、口出し）
- ただし、2019 年は 2010 年に比べて改善の兆しがみられる

◆ 外出時の嬉しかった経験

- 女性は男性よりも多くの嬉しかった経験をしている
- 実質的な負担を減らす手段的サポートや子ども連れを受容する態度による情緒的サポートも
- ただし、2019 年と 2010 年に大きな差異はない

◆ 外出時の困りごと

- 2019 年は 2010 年よりも改善している状況
- 物理的な改善、周囲を気にせず子どもと過ごせる場所、迷惑がられる機会の低下

◆ 周囲や社会への期待

- 2019 年は 2010 年よりも外出しやすい環境を感じている傾向
- 安全確保、子ども連れを受容する態度、子どもが自由にふるまえる空間、物理的環境のストレス減少
- ただし、男性との共同養育、子ども連れへの見守り期待は道半ば

② 結論

街中のバリアフリー化や駅を中心とした再開発、タバコに対する社会的な圧力などを通じて、

子ども連れの外出において行動を制約する物理的要因が取り除かれつつあること、また、「子どもを社会で育てていこう」という意識が建前の上では浸透しつつあることから表立って子ども連れを攻撃する人びとも減ってきているといったことが背景となり、女性（母親）の外出先満足度は高まる傾向が見られる。「マタニティマーク」の認知・理解が進み、当事者がその効果を体感できていることも満足度の上昇に貢献していると考えられる。

女性たちにとっては、自分たちが社会の中で受け入れられているという実感をもつことが外出時のネガティブな意識を払しょくすることに効果がある。その際に重要なのは、妊婦や子ども連れの外出の困難に対する理解と、過度にならない程度のちょっとした思いやりや気遣いを女性たちに示すことである。女性たちが周囲や社会に期待することを見ても、現在の状況は、子育てにやさしい社会といえるのかどうか、当事者が確信を持ってない状況にあるようである。子育てをする当事者に社会への信頼を持ってもらうためにも、さまざまな機会を通じて子育てを応援するメッセージを継続的に発信することが重要である。